教育社会学特講　最終レポート
3回生　逢恋

■「西の学校」と「東の学校」の相違点

１．改革の行い方

時代の変化に合わせて公立学校も変化していかなければいけないのは当然だが、やはり学校が変化していくのは凝り固まった環境の中でなかなか難しい。今回取り扱ったのは特に変化に合わせ改革をしてきた学校であった。改革とは流れに流されたものでなく誰かが発起して起こるものである。

西の学校では主に改革は教師が考え、実行していくものだった。大阪府細河小学校では、授業づくりとしてはてなの学習を取り入れながら、学校生活での活動へも努力目標を立てたりと様々なアイディアを教師が実現している。兵庫県大庄北中学校では、家庭への訪問を積極的に行う、自主ノートではコメントを付けるなど充実した対応には教師の仕事量の増加が懸念される。補習学習をする学校も多く、それはすべて教師の仕事となる。その為教師の負担は大きいが、仲間と協力して熱意を持って生徒と接していた。

それに対して、東の学校（今回は杉並区立和田中学校を主に考える）では外部の手を借りることで改革を進める動きが強かった。教師は一番大切な授業に力を注げて、改革することによる教育の根幹の質を落とさないようにしていた。外部の力を借りることで日常にプラスされた感覚がある。閉鎖的であった学校に外の人が入ることで今までにない社会性などが得られるようになった。しかしそれは、学校をよく理解して出来ていない人が入ることでもあり、生徒のことを理解し効率よく改革成果があげられるかが問題であり、方法をよく練る必要がある。

２．目指す先

学校教育はただ教科学習範囲を教えることだけを行っては、味気のないものとなる。やはり、教科学習にしても学校全体にしてもどのようなことを学び、どんな大人になって欲しいかという目標のようなものを共通観念として持つことでより実現への力となる。

西の学校では同和教育に力をいれている学校がいくつかあり、人権を大切にすることを目指していた。本に書かれていた中では非行などの荒れや、学力格差をなくすための授業・学校・地域づくりについて持ち上げられていた。大阪府長吉高校では、同和地区と関わりながら多文化共生を目指し「個」を大切にする教育を行っている。同和教育とは歴史的に部落差別を解消するため、同和地区の子どもの教育水準をあげる目標があった。現代でも一般的な教育格差を減らす為の習熟度別授業を行い、低学力者を減らす努力をしている学校は多かった。その目的への特別施策としての同和教育は減りつつあり、最近は人権啓発教育となっていった背景がある。なので、西で盛んな同和教育とは人と人との関わりを差別なく行うのが主な目標といえる。ただ、過剰な同和教育や現代にそぐわない形での押し

付けも多いようで、私としては現在よりも過去に囚われた教育目標のように感じた。他の目標として新潟県聖籠中学校では、学級以外の生徒集団として少人数の HB を設け、多様な人間関係・空間・活動から自分の居場所を見つけていくという趣旨がある。

東の学校(和田中)は、不利層の子どもが多くその居場所づくりやドテラによるサポートももちろん行われていたが、やはり「よのなか科」や夜スペで重視しているのは、多様化する社会の中で生き抜く力が必要だというものに感じた。特別な勉強、勉強以外に学ぶことなど生きていく中で必ずしも平等でないことを学校で教えるのもひとつの教育となっていくのかもしれない。

西の学校、東の学校と目指しているものは少し異なっているように感じたが、どちらが正解というものは現時点でわかるものでなく、この先も正解という形ではわからないかも知れない。ただ、どちらにも良い点があり、悪い面があることに気付き、今後に生かしていけるといいと思う。

３．地域との関わり

公立学校は地域の中に存在する為、学校の中だけでなく地域と関わり存在することを重視している学校が多くある。

西の学校での地域との関わりは福岡県金川小学校では、学習応援団・学校応援団、田川ふれ愛義塾など保護者・地域の人が人間関係のサポートをしていた。大阪府布忍小学校では、ぬのしょうタウンワークスで授業の一環として参加・体験型の地域との関わりをしていた。静岡県東部小学校では地域在住の外国人向けの授業を手掛け、地域には交流センターが存在した。高知県野市中学では、荒れた学校に保護者が危機感を持ち、あいさつ運動を始めたことで学校改革がスタートするなど保護者が学校と共に変えていった。大阪府松原第三中学校では校区ヒューマンタウンフェスティバルを開き、学校を地域に開放し子どもと地域住民との関わりを作っている。

東の学校では、保護者や地域住民というよりは、地域行政の介入の方が強く感じる。教育活動の条件設備をする教育委員会と教育活動の場である学校と役割分担をしていたり、杉並区のアクションプランであったり、今回の民間人校長の採用。そして学校の自由選択性など、学校に対しての期待が行政に強い。和田中にしても、情報発信であった出島は地域住民に対してよりも世間に対しての広いものであり、どこか地域との関わり方がそこにいる人を対象にしていない所が地域に愛されない学校という一面を作ってしまったような気がする。

こういった点で私としては東の、都会の方が地域住民との関わりが薄く感じた。行政の介入によって全体の改革ができるので悪いとは言わないけれど、今後大阪もこのように地域住民との関わりが薄くなっていくのではないかと感じた。

■子どもたちに力をつけるために望ましい取り組みについての考え

私は名古屋の教育を受けてきたので、関西に来てここまで学校って違うことをしてたりするんだという驚きがあった。教育という形は一つという訳でなく、目標も一つでもなく、正解自体ないが、今回授業で様々な学校の取り組みを学び、私がそこから自分なら子どもたちに力をつけるために取り組んでみたいと考えたことを述べたいと思う。

前項１で取り上げたが、改革を行うのに教師だけでは辛い。ただ、教師は良い発火剤になりえるので、頑張れる部分は頑張っていけたらとも思うし、提案を出すこともしやすいだろう。授業研究以外でやって欲しいのは自主ノートの閲覧作業。自主ノートがあることで毎日アンテナを張り勉強する力が付く。知ってる人が見てくれるというのはモチベーションになるし、個々の様子が分かるので、担任が見れると良い。外部の力としてはやはり講演は欠かせないと思うが、トークの上手い下手があるので、あまり得意でない場合は会話形式にしたり、お悩み相談とか、開催工夫を考える人がいれたらいい。全員が講演で勉強になることはないかもしれないが、心に届く人にはかけがえのない体験になる場合もあり、様々な視点を知る機会になるといい。教師・外部以外に私は生徒からの改革があるのが望ましいなと思う。過去の学生運動時のような不満は溜まっておらず、現状を鵜呑みにしているだけではいけないと感じている。生徒会や実行委員会のような組織に出来るだけ自由を与えたり、個々のクラスに時間を与えたりすることで生徒達から変えていこうというものが出てきたらいいなと思う。

目指していきたいのは、やはり自分で考えて伝えられて、相手の事も思いやれる人。現代化の中で特に顕著なのがネット社会で、顔が見えないことによりコミュニケーションが雑になってしまっていると感じる。また恋愛率も低く異性との関わりも苦手になっているので、相手の事を理解しあい、そのうえで伝えられる力がこれから必要とされていくと思う。これを達成するためには、やり方が重要になってくるだろう。授業の中でも、一問一答の形だけでなく、理由を述べたり、考えのまとめ方にも焦点を当てていくのがいい。また、グレード別で仕切るなら仕切ったなりに相手に合わせた授業展開をし、分けないなら生徒同士の学習スタイルも取れるとよい。ただ、上手く行わないと拒否感で質がより悪くなるので、注意が必要だとも思う。

地域との関わりとして、地域向けのイベントであったり、地域の人が授業を受けるまたはしてもらう形を取ってみたい。学校の中ではどうしても同年代との関わりがメインになってしまうので、違う年代の人との会話をしておくのも教育である。特に近年はご近所付き合いも減り、昔に比べて孤立化が進んでいるが、社会に出たらそうもいかないので、こどもの力として違う年代とも関わって欲しい。また、時代の変化により良くなったこともたくさんあり、その知識を大人にも知ってもらいたい。研究の発達により昔分からなかったことも分かるようになり、それを知らない大人も多い。

以上子どもたちにつけてもらいたい力について考えてみたが、私は子どもたちだから持ってる力も大切にしたいとも思う。子どもらしさから新たな発見もきっとあるだろう。